

レトリカル・コミュニケーションにおける 4技能の捉え方について

岩 本 一

1 はじめに

アメリカのスピーチ・コミュニケーション学は、1960年代後半に社会科学的研究方法を取るコミュニケーション学の台頭に影響を受けて発展してきた。

スピーチ・コミュニケーション学は、非常に学際的な学問領域である。そこで大きく分けると、次のような領域となる。

1. コミュニケーション理論分野

コミュニケーション理論とは、人間のコミュニケーション行動やプロセスについて現象を分析し、その法則性を発見、概念化する分野である。

2. 対人コミュニケーション分野

対人コミュニケーションとは、通常、個人対個人の間での言語・非言語のコミュニケーション現象の研究である。

この分野の研究対象は、対人関係の維持、発展、解消などや説得、印象形成、対人魅力、自己提示、コミュニケーション能力、コミュニケーション不安、談話分析などである。

3. 小集団・組織コミュニケーション分野

小集団・組織コミュニケーションとは、複数の人間から成る集団内や集団間のコミュニケーションを云う。その研究対象は、小集団や組織におけるリーダーシップ、問題解決、意思決定、モチベーション、生産性向上などである。

4. 異文化コミュニケーション分野

異文化コミュニケーションとは、異なる文化背景をもつ人々のあいだで行われるコミュニケーションである。

その研究領域は、価値観、習慣、信条、世界観などの文化的要因が及ぼすコミュニケーション行動への影響を考察、分析、そしてその障害の予防策の解明などである。

5. レトリカル・コミュニケーション分野

レトリカル・コミュニケーションとは、コミュニケーション行動を一定の批評方法に基づいて分析、解釈、評価することである。その研究対象は、スピーチ、ディベート、ディスカッションなどである。

以上、スピーチ・コミュニケーション学を分類したが、この稿では、レトリカル・コミュニケーションによって、4技能(Reading, Writing, Speaking, Listening)を捉え直して見る。

まず、最初に、レトリカル・コミュニケーションの定義について述べる。

2 レトリカル・コミュニケーションの定義

レトリックとは、コミュニケーション目的を達成するために取ることが可能な手段ないしはそれを考える学問である。また、レトリックとは、説得のための手段を発見する能力で、このレトリックの具体化されたものがスピーチである、と考えられる。

つまり、レトリカル・コミュニケーションとは、ある状況のもとにおいて、メッセージ(スピーチ)の発信者と受信者との間に、言語ならびに／あるいは非言語を使って展開される目的達成行為(ないしはその過程)である。

3 レトリカル・リスニング／リーディング

3. 1 レトリカル・リスニング

すべてのリスニングは、レトリカル・リスニングである。なぜなら、すべてのリスニングが聞き手という主体の目的達成行為となるからである。

3. 1. 1 種類⁽²⁾

レトリカル・リスニングには次のようなものがある。

1. Informative Listening (情報取得的聴解) :

情報伝達スピーチから情報を正しく捉える聞き方。

2. Critical Listening (批判的聴解) :

説得スピーチから内容と論理の良否を判断し、自分の態度を決定する聞き方。

3. Appreciative Listening (鑑賞的聴解) :

余興型スピーチに心身を反応させ、知的、情緒的、審美的満足を得る聞き方。

4. Critical and Appreciative Listening (批判鑑賞的聴解) :

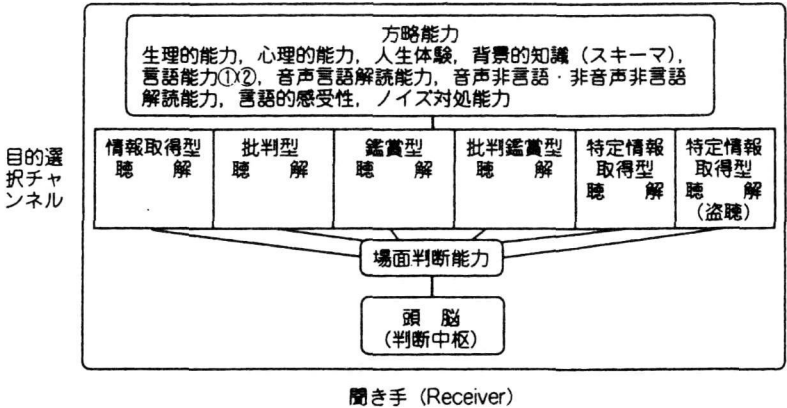
最も基本的なレトリカル・リスニングである。

5. Selective Listening (選択的聴解) :

特定の情報のみ拾う聞き方。

1～4は語り手の目的に合わせる聞き方であり、5は、語り手の目的に合せず、自分自身の目的で聞く聞き方である。しかし、いずれにしても1～4は、相手に合わせるという選択をしている意味において、聞き手主体である。

3. 1. 2 構造



「英語コミュニケーションの理論と実際」 近江 誠 1996.P64

3. 1. 3 批判鑑賞的聴解⁽³⁾

では、レトリカル・リスニングの最も基本的なものは、Critical and Appropriate Listening (批判鑑賞的聴解)である。それは、目的もスタイルも異なる英語を聞き、言語・非言語音声と話者の目的との関係を鑑賞的かつ批判的に聞く能力を養う方法である。それには2つの定義がある。

1. 教材に対して、語り手のレトリックを批判鑑賞的に聞く聞き方

WHO is talking(speaking) to WHOM, WHERE, WHEN, WHAT and HOW? WITH WHAT EFFECT? (語り手(WHO)が誰に向かって(TO WHOM)、どこから、いつ(WHEN and WHERE)、どういう目的で(WHY)、があってそれから何を(WHAT)、さらにはどのような話の組立や表現を使って(HOW)語っているのかをつかみ、その目的はどの程度達成されているのか(With WHAT EFFECT)を見るのである。

2. 同化と異化の概念による聞き方

批判鑑賞的聴解とは、聞きとりを通して話し手の思考と感情の状態を感じ

つつ（同化1）、ものによってはさらに、その継続的な叙述の描写の展開に添って想像の世界に自己を投入し、登場人物になったつもりで共に行動し、同じ心理状態を覚え（同化2）、同時にその用語選択、構成、音声表現を、内容と話し手の最終的意図との関係から評価しつつ聞く聞き方である（異化）。

例えば、イラク紛争について英語放送を聞いた時、内容を捉えるだけでなく、その用語や話の組立てから情報伝達が主目的であるニュースであると判断し、次に、それにしては、音声的に感情過多であるなどと批評する聞き方である。

a.手順⁽⁴⁾

批判鑑賞的聴解の手順について概観してみよう。

1. 教材（録音あるいは録画されたもの）

a 文学作品

b スピーチ

2. 虫食いレトリカル・チャート配付

(1) 段階的聴解：数回に分けて聞かせる。

毎回集中するポイントを決める

(2) Rhetorical Questions（リレリカル・クエッション）

a WHO is speaking?

b TO WHOM is he speaking?

c WHERE and WHEN is he speaking?

d WHY (=FOR WHAT PURPOSE) is he speaking?

e WHAT is he speaking HOW?

f WITH WHAT EFFECT is he speaking?

教材を何回か聞かせ、レトリカル・チャートを完成させ、そしてRhetorical Questionsを口頭で答えさせ、最後に、同化と異化の概念に基づいて教材を鑑賞的かつ批判的に聞く能力を養う。

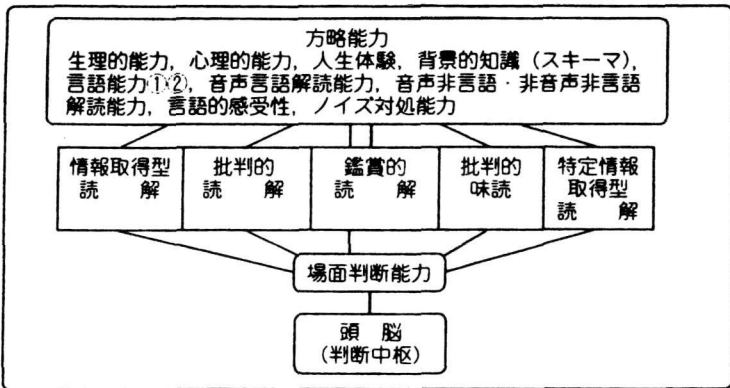
これは、ことばの選択、論理構成、音声表現が話者の最終的意図をどれだけ充しているかを訊ねることである。

以上、批判鑑賞的聴解は、リスニングのみならず、スピーキング、ライティングそしてリーディングを同時に伸ばすことができる方法である。しかし、リスニングの補助活動として、多読と多聴の両方の訓練が必要である。

3. 2 レトリカル・リーディング

レトリカル・リーディングを考えると、その定義は、レトリカル・リスニングと同じである。なぜなら、リーディングは、読み手が主体の能動的なコミュニケーション行為だからである。

3. 2. 1 構造



読み手

「英語コミュニケーションの理論と実際」 近江 誠 1996.P63

3. 2. 2 批判的味読⁽⁵⁾

レトリカル・リーディングの基本とは、Critical and Appreciative Reading (批判的味読) である。

批判的味読とは、文章をその語り手 (著者あるいは著者が託した語り手)

の思考と感情の状態で読みつつ（同化1）、ものによってはさらに、その継続的な叙述や描写の展開にそって想像の世界に自己を投入し、登場人物になったつもりで共に行動し同じ心理状態で読む（同化2）、同時にその形式（言語表現）を、その内容と書き手の最終的意図との関係から評価しつつ読む。つまり「異化」して読む読み方である。

同化1、2についてさらに述べると、同化1は、文章の著者、あるいは著者が託した語り手（ナレータ）への同化（模倣）である。同化2は、書き手と話中の人物（同じ場合もある）の2重の同化である。批判的味読において、同化は必ずしも必要条件だが十分条件ではない。なぜなら、「避け得るべき行動、無駄な苦しみなどに感情同化することは無意味であり、また自分が感情を同化した主人公が見ただけのものしか見えない、そこで異化が必要となる。なぜなら、異化は、読み手が書き手の外に出て作品を外から眺め、自己を含む自然と社会を批判的に対象化し、内容と話者の目的を表現形式に照らし合わせて外から見るのも異化であるからである。

3. 2. 3 手順⁽⁶⁾

批判的味読の手順について概観してみよう。

1. 黙読
2. 解釈ポイント
3. 音声身体表現
4. レトリック批評

1. 黙読

黙読は、じっくり読み全体の感じをつかむ。なるべく辞書を使用しない。

2. 解釈ポイントによる分析作業

下の1) - 5) と、それが示唆する音声・非音声の関係を考える。

- 1) 誰が(WHO) 語っているか（作中人物とは区別する）。
- 2) 誰に向かって(TO WHOM) 語っているか。
- 3) どんな時に(WHEN)、どこから、聞き手にどれほどの距離を置い

て、どんな姿勢から(WHERE) 語っているか。

- 4) 何の目的で(WHY) 語っているか (情報伝達(to inform) か、説得(to persuade) か、歓待(to entertain)か)、これ以外にも弁解(to defend)、詰問(to cross-examine)、反駁(to rebut) 等がある。
- 5) 語り手は、何を(WHAT)、どのように(HOW) 語っているか。

・ 物語の場合—5Ws and 1H

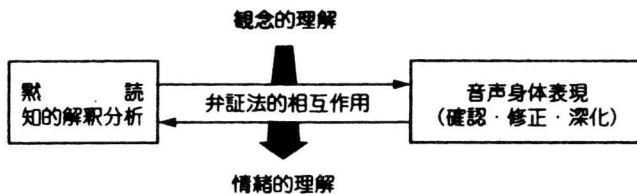
・ 説明分・説得文の場合—序論、本論、結論、主要論点とその立証部は／立証部の種類は譬え話、引用、例証、統計、説明等のいずれか／配列は時間配列・環境配列、論理配列、原因結果配列、単純複雑配列、話題別配列等のいずれか／言い換え等は／その他、構成上の特徴は、Sub-Text (せりふ) はどうなっているか。Textに対するもので、話者の心中に間断なく流れる思考や感情の線、原則として両者は一致するが、食い違い (たとえば皮肉とか世辞など) もある。

3. 音声身体表現

身体を動かして音読を行う。それには2つの理由がある。

(1) 観念的理解から情緒的理解への移行。

書き手や作中人物、場面、表現形式などに対する頭だけの理解(観念的理解)を心と身体で理解する(情緒的理解)まで深めるために実際に声を出し、体を動かしてみる。そして再び観念的理解に戻る。この往復作業の中で理解は確認、修正され、読みは弁証法的に深化されていく。図示すると、



図： 解釈と理解の課程

(2) 内的音声感覚（形式スキーマ）が働く

実際に声を出し、身体を動かすことによって、理解力を促進、深化される意義がある。つまり、形式スキーマ（言語・非言語表現、レトリックの構造に関する先行知識）を促進、深化させることである。言い換えると、語り手の語りやりズム感到同化することによって内的なスピーチ感覚を身体の中に育てることである。

4. レトリック批評

その人が(WHO)、その人に向かって(TO WHOM) そこから、それだけの距離を置いて、その姿勢から、それをしながら、その時に (WHERE)、その話を(WHAT)、その話の段取りと言葉遣いで(HOW) 話すことによって、コミュニケーション目的はどの程度達成されているか (WITH WHAT EFFECT)

4 レトリカル・スピーキング/ライティング

話す/書くコミュニケーションとは、口頭/文章で自分のコミュニケーション目的を達成させようとする行為である。したがって、speaking/writing はレトリカル・スピーキング/ライティングである。そこで、その能力は、口頭/文章で自分のコミュニケーション目的を達成できる能力（レトリック操作能力）である。

4. 1 レトリック操作能力⁽⁷⁾

レトリック操作能力とはいかなるものであり、どういう過程の中で発揮されるか概観してみよう。

(1) 場面判断能力（物理的場面、社会・文化的場面）

a Who speaks/writes?

b To Whom is he/(= am I) speaking/writing?

c When/Where is he(=am I) speaking/writing?

d Why(for what purpose) is he (=am I) speaking/writing?

以上のことを判断できる能力である。

(2) 言語記号操作能力(1)＝連続的発話能力

場面的判断能力ができれば、言語記号操作能力＝連続的発話能力に移る。連続的発話能力とは、その言語の助けを借りて思考を発展させていたり感情を表したり、必要とあらば音声言語として口に出し、そのまま語り続けられる潜在能力である。例えば、外国語の場合、母語チャンネルから外国語チャンネルに切替え、その時点からその回路に従って思考を発展させて、語り続けることを意図的に養うこの能力こそ、連続的発話能力である。

(3) 言語記号操作能力(2)＝方略能力

目的(＝d)達成のために適切な用語、論理構成、文体の選択、適切な話、エピソードを吟味し執行する能力である。また目的(＝d)達成のために効果的な音声表現を選択し執行できる能力である。

(4) 非言語記号操作能力「周囲言語、身体運動記号」(方略能力)

目的(＝d)達成の助けとして適切な非言語表現を選択できる能力である。

まず、レトリカル・スピーキングにおいて、言語記号操作能力(1)の実質は、(3)の目的達成のために効果的な音声表現を選択、執行できる能力として発揮される必要がある。

その音声表現は、発声、プロジェクション、共鳴、調音、発音、強勢、リズム、抑揚、全体的な音調、音量、音程、速度、ヴォーカル・パライエティ、ドッピング、アンダーカッティング、滑舌性などである。次に、

レトリカル・ライティングにおいては、言語記号操作能力の実質は、(3)の目的達成のために適切な用語、論理構成、文体の選択、適切な話、エピソードを吟味して執行できる能力として発揮されなければならない。その時、スピーキングと同様、音声身体感覚が必要となる。

レトリカル・スピーキング／ライティングの両方に発揮できる能力は、(4)の非言語機能操作能力〔周囲言語、身体運動記号〕(方略能力)である。

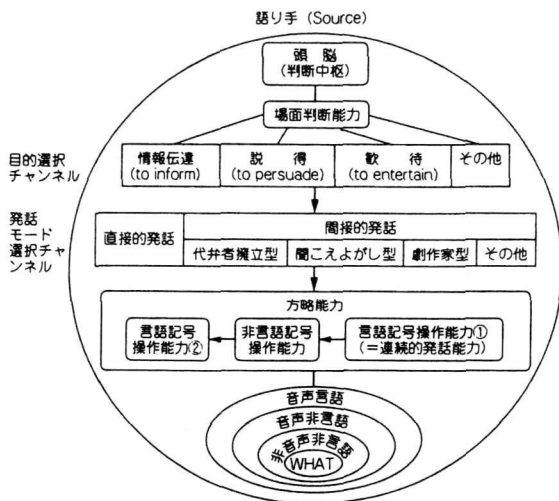
非言語には音声非言語と非音声非言語がある。音声非言語は、うなり、呻き、有声のあくびなどである。非音声非言語は、服装、体臭などである。仕草、態度、顔の表情、筋肉の表情などは身体運動記号である。音声非言語と非音声非言語のうち服装、体臭などを含めたものを周囲言語という。

ところで、英語を話す／書くコミュニケーション能力(レトリック操作能力)は、場面的能力、連続的発話能力、言語／非言語の方略能力を同時進行させて自分の目的を達成するかを考え、意図的に演出(操作)し得る能力である。

結論として、話す／書くコミュニケーション能力は基本的には同じものである。したがって、話す自信のないものは本当には書けない。しっかりと書けないものは、しっかりと話せない。ライティングは、文字を使ったスピーキングであり、スピーキングは声と体を使ったライティングである。

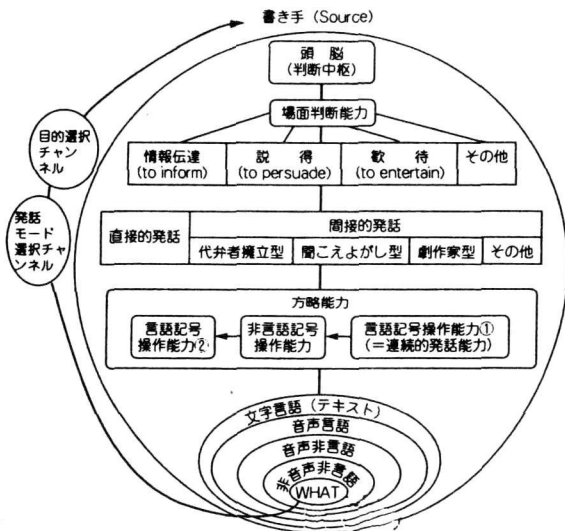
4. 2 構造

(1) レトリカル・スピーキングの構造



「英語コミュニケーションの理論と実際」 近江 誠 1996.P64

(2) レトリカル・ライティングの構造



「英語コミュニケーションの理論と実際」 近江 誠 1996.P63

5 おわりに

以上述べてきたように、レトリカル・リスニングの批判鑑賞的聴解とレトリカル・リーディングの批判的味読においてのアプローチの仕方はほとんど同じである。なぜなら両方とも、場面的判断能力や同化と異化の概念によって聞いていたり、読んだりする能動的なコミュニケーション行為であるからである。

批判鑑賞的聴解や批判的味読で応用した同化／異化の概念を更に述べる⁽⁸⁾。同化の概念は、アリストテレスの感情同化、つまり、模倣を仲介としたカタルシスやリップスの感情移入をコミュニケーションにまでおしひろげたものである。同化における、批判鑑賞的聴解では、聞きとりを通して話し手の思考と感情の状態を感じ（同化1）、さらにその継続的叙述の描写の展開に添って想像の世界に自己を投入し、登場人物になったつもりで共に行動し、同じ心理状態を覚える（同化2）。批判的味読では、文章をその語り手（著者あるいは著者が託した語り手）の思考と感情の状態で読む（同化1）。その継続的な叙述や描写の展開にそって想像の世界に自己を投入し、登場人物になったつもりで共に行動し同じ心理状態で読む（同化2）。これに対して異化とは、プレヒトが戦争のイリュージョンの拒否を目的とした演劇活動から発生したもので、感情同化作用を抑制し、批判的態度を喚起させることである。批判鑑賞的聴解での異化とは、発信者と自分のコミュニケーションを外から眺め、発信者の意図とその表現法との関係を批判的に見ることである。批判的味読での異化とは「自己をふくむ自然と社会を批判的対象化する方法だと言うことができる。

一方、話す／書くコミュニケーションは、口頭／文章で自分のコミュニケーション目的を達せようとする行為である（レトリック操作能力）。その意味において、ほとんどすべてのスピーキング／ライティングはレトリカル・スピーキング／レトリカル・ライティングである。なぜなら、うまく書けないものはうまく話せない。ライティングは文字を使ったスピーキングで

あり、スピーキングは音声と身体を使ったライティングだからである。

したがって、冒頭で定義したように、レトリカル・コミュニケーションとは、ある状況のもとにおいて、メッセージの発信者と受信者との間に、言語ならびに、非言語を使って展開される目的達成行為（ないしはその過程）である。（近江 誠 1996.P37）

注

1. 近江 誠、「英語コミュニケーションの理論と実際」 P39 研究社 1996
2. Ibid., P42
3. Ibid., P47、 pp120～121.
4. Ibid., pp122～125
5. 近江 誠、「オーラル・インタープリテーション入門」大修館 1992 P62 近江 誠、前掲書 pp53～56
6. Ibid., P63、（オーラル・インタープリテーション入門）Ibid., pp56～62（英語コミュニケーションの理論と実際）
7. 橋本満弘他編、「英語コミュニケーションの理論と実際」 桐原書店、1996 pp101～111 近江 誠、前掲書 pp65～72
8. 佐藤 毅、「同化と異化」、『コミュニケーションの典型』講座・コミュニケーション 6 研究社、1973 pp52～72

参考資料

1. 近江 誠、「英語コミュニケーションの理論と実際」 研究社 1996
2. 近江 誠、「オーラル・インタープリテーション入門」 大修館 1992
3. 橋本満弘他編、「コミュニケーション論入門」 桐原書店 1997
4. 橋本満弘他編、「英語コミュニケーションの理論と実際」 桐原書店 1996

5. JACET オーラル・コミュニケーション研究会、「オーラル・コミュニケーションの理論と実戦」 三修社 2002
6. J.B.ベンジャミン、西川一廉訳、「コミュニケーション」 二瓶社 1996
7. 岡 秀夫他著、「オーラル・コミュニケーションハンドブック」 大修館 1999
8. 古田 暁監修、「異文化コミュニケーションキーワード」 有斐閣 1997
9. 講座コミュニケーション6、コミュニケーションの典型、研究社 1973

